

○トルコギキョウ病害

黄化えそ病(ウイルス)

(生態と症状)

- ① 葉でははじめ退緑斑を生じ、黄化、えそを引き起こす。
激しい場合は、えそ斑を伴った奇形葉を生じ、茎内部の空洞化によって萎凋枯死する。
- ② トマト黄化えそウイルス(TSWV)の感染により発生する。
- ③ ミカンキイロアザミウマをはじめとするアザミウマ類により永続伝搬される。

(防除)

- ① アザミウマ類の防除を行う。

えそ輪紋病(ウイルス)

(生態と症状)

- ① 葉ではえそ斑点、えそ輪紋、不定形のえそ等が発生し、茎ではえそ条斑を生じる。
- ② アイリス黄斑ウイルス(IYSV)の感染により発生する。
- ③ ネギアザミウマにより永続伝搬される。

(防除)

- ① アザミウマ類の防除を行う。

葉巻病(ウイルス)

(生態と症状)

- ① 新葉を含めた上位葉が葉表を内側に巻き、葉裏に葉脈が隆起する。
節間が短縮し、株全体が萎縮する。花卉も筋が浮き上がったような奇形となる。
- ② トマト黄化葉巻ウイルス(TYLCV)の感染により発生する。
- ③ タバココナジラミにより永続伝搬される。

(防除)

- ① コナジラミ類の防除を行う。

株腐病(糸状菌)

(生態と症状)

- ① 定植直後、生育初期に土壤に接した葉から腐敗が始まり、やがて株全体が腐敗して欠株となる。
- ② 腐敗は初め灰褐色であるが、やがて褐色から濃褐色となり腐敗する。
- ③ 定植直後に高温多湿条件が続くと発生しやすい。

(防除)

- ① 作付け前に土壤消毒を行う。
- ② 発病株は速やかに抜き取り処分する。

立枯病(糸状菌)

(生態と症状)

- ① 地上部の茎葉が萎凋し、やがて立枯れ症状を示す。
- ② 根の腐敗が激しい。
- ③ 茎表面に菌糸を生じない場合と、地際部が褐変して腐敗する場合とがある。

(防除)

- ① 作付け前に土壤消毒を行う。
- ② 被害株は土ごと掘り取り処分する。
- ③ 多発圃場では連作を避ける。

炭疽病(糸状菌)

(生態と症状)

- ① 茎、特に葉柄基部に発生する。
- ② 葉柄基部に褐色斑点を生じ、その腐敗が茎を取り囲むとそこより上位が萎凋枯死する。
- ③ 腐敗は上下に進展していく。
- ④ 褐色腐敗部分には輪紋状に鮭肉色の分生子塊が形成され、やがて黒色となる。
- ⑤ 多湿条件下で発生しやすい。

(防除)

- ① 通風をよくしてハウス内の換気を図る。
- ② 発生前からの予防的な防除を行う。
- ③ 発病株は速やかに除去する。

根腐病(糸状菌)

(生態と症状)

- ① 育苗中および生育中に発生する。
- ② 下葉から生気がなくなり萎凋する。曇雨天時や朝方には回復することが多いが症状が進むと回復せずに株全体が立ち枯れる。
- ③ 萎凋株の根は先端部が薄褐色に変色腐敗している。
- ③ 土壤水分が多い条件下で発生しやすい。

(防除)

- ① 圃場の排水を良好にする。
- ② 作付け前に土壤消毒を行う。

灰色かび病(糸状菌)

(生態と症状)

- ① 葉、花弁、茎に発生する。カルシウム欠乏によって生じた葉先の褐変部分から腐敗が進行することもある。
- ② 花弁では褐色小斑点を生じたり、花弁の縁の部分から煮えたように腐敗する症状を示す。
- ③ 多湿時に褐変部に灰色の分生胞子を密生し、周辺に飛散して蔓延する。
- ④ 土壌中に残存して伝染するか、または周囲から飛散してきた胞子により伝染する。
- ⑤ 多くの植物を侵す多犯性の菌である。

(防除)

- ① 風通しをよくし、湿度の低下に努める。
- ② 薬剤感受性低下を防ぐためローテーション散布を心がける。

斑点病(糸状菌)

(生態と症状)

- ① 5~10mmの退緑斑が生じ、やがて灰褐色のすす状の分生胞子が形成される。
- ② 発生は下葉から上位へ伸展し、病勢が進むと葉は枯死する。
- ③ 夏期高温時の発生は少ないが、ほぼ年間を通して発生し、特に春から秋の多湿条件下で多発する。
- ④ 罹病残渣や施設資材上に残った分生胞子が感染源となると考えられる。

(防除)

- ① 風通しをよくし、湿度の低下に努める。
- ② 発生前からの予防的な防除を行う。
- ③ 作付け後は薬剤処理による古株処理を行い、次作への感染源を残さない。

○トルコギキョウ虫害

ハダニ類

(生態)

- ① 葉の組織に傷をつけ吸汁するので、葉に微小な白斑点を生じ、かすり状の被害となってみえる。
- ② 高温乾燥時に増殖率が高くなる。

(防除)

- ① 葉裏に多く寄生しているので、葉裏に薬剤がかかるように丁寧に散布する。

アブラムシ類

(生態)

- ① 寄生しやすい種類としては、モモアカアブラムシとワタアブラムシがある。
- ② 花や花弁に寄生する。
- ③ 多発生するとすす病を併発したり、白い脱皮殻で見苦しくなるなど外観を著しく損なう。
- ④ ウイルス病を媒介する。

(防除)

- ① 薬剤抵抗性の発達を避けるため、ローテーション散布を行う。

コナジラミ類

(生態)

- ① タバココナジラミとオンシツコナジラミが発生する。
- ② 成虫は上位葉の葉裏、幼虫は中・下位葉の葉裏に寄生する。
- ③ 排泄物により葉がテカテカとひかり、すす病が発生して黒くなる。
- ④ トルコギキョウ葉巻病の病原体であるトマト黄化葉巻ウイルス(TYLCV)を媒介する。

(防除)

- ① 薬剤は展着剤を加用し丁寧に散布する。
- ② 密度の低い発生初期から防除を行う。

アザミウマ類

(生態)

- ① 花弁や葉にかすり状の白斑症状を生じる。
- ② 未展開葉に寄生すると、葉がケロイド症状を示し生育が阻害される。
- ③ 発生種はミカンキイロアザミウマ、ヒラズハナアザミウマなど多種である。
- ④ 種によりトマト黄化えそウイルス(TSWV)やアイリス黄斑ウイルス(IYSV)を媒介する。

(防除)

- ① 発生初期防除に努め、生息部位に薬剤が十分かかるように散布する。

ハモグリバエ類

(生態)

- ① 幼虫が葉の表皮を残して葉肉内を食害するため、葉に蛇行した白いすじを生じる。
- ② 成虫が産卵及び吸汁のために葉に傷をつけるので白い小斑点を生じる。

(防除)

- ① 発生初期の防除が重要であり、発生を認めたらただちに有効薬剤で防除する。

ヨトウムシ類

(生態)

- ① 雌成虫が葉裏に卵塊を産み付ける。
- ② 若齢幼虫は葉裏を集団で加害するため白変葉を生じる。
- ③ 幼虫が成育するとともに食害量が加速度的にふえる。

(防除)

- ① 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため若齢幼虫のうちに防除する。
- ② 施設栽培では開口部に目合い5mm程度の防虫ネットを使用する。

